

**論文題名:** 東京都在住ネパール人留学生の生活実態に関する研究

**主査教員名:** 山本 須美子

**研究科・専攻・学年:** 社会学研究科・社会学専攻・博士前期課程 2 年

**氏名:** 陳 定妍

### **研究目的:**

少子高齢化により、介護、建設などの領域で人手不足の問題が深刻化している現在の日本社会では、外国人受け入れ問題が注目を集めている。本研究は留学生を中心とする在日ネパール人を対象に、ライフヒストリーを構成するインタビューを実施することを通して、彼ら/彼女らの来日前の生活や来日後の仕事、生活様式の変化、友人関係等を明らかにすることを目的とする。

### **調査概要:**

調査方法としては、在日ネパール人、特に在日ネパール人留学生を対象に、聞き取り調査と参与観察を実施した。聞き取り調査では、18名の在日ネパール人を対象とした。日本に入国する際のビザの種類をもとに分類すると、技能資格者 6 人、家族滞在資格者 1 人、日本人配偶者 1 人、そして留学資格者 10 人である。聞き取りの内容は、主に来日のきっかけ、来日後の生活と仕事などを中心とした。さらに、2016 年 8 月から 2019 年 10 月まで、3 年以上の期間にわたって、ネパール人留学生の生活実態を明らかにするため、筆者もアルバイトとして働いた、ネパール人留学生が多い飲食店で参与観察を行った。

### **論文構成:**

本論文の第一章と第二章では、先行研究に基づき、ネパール社会の特徴、ネパールにおける送り出しの背景、現状と日本における外国人受け入れの歴史の変遷及び受け入れの現状について整理した。第三章では、政府の公表データに基づき、在日ネパール人の受入れの歴史、地理的分布、職種による分類及び留学生の進路について述べた。

第四章では、コックや経営者等の留学生以外の在日ネパール人 8 名の生活実態を筆者のインタビューに基づいて検討した。技能資格者はほとんど誰かの誘いを受け、高額の仲介費用を払うために借金して来日していた。仕事の時間が長いので、休日はどこかに遊びに行くより、家族と一緒に過ごすことが多い。職場の上司も同僚も同じくネパール人の場合が多く、来る客も同じ国の人が多い。また、職場で日本語を使う必要がないので、日本語を勉強しても覚えられない。要するに、彼らは日本に来たが、給料の高さと生活の利便性以外、ネパールにいる時と変わらないような生活をしている。技能資格以外の日本人配偶者や経営資格の在日ネパール人は日本人とのつながりが多く、商売するには高い日本語能力が求められる。彼らはほとんど日本語の勉強をしなかったが、商売をする間に日本語が上達し、コミュニケーションを取る際に非常に流暢な日本語を使っている。

第五章は来日のきっかけ、来日後の生活と進路という三つの視点から筆者がインタビュ

一した在日ネパール人留学生 10 名の事例を分析した。留学資格のインタビュー対象者もほぼ誰かに誘われ、ネパールの仲介会社を通じて来日していた。彼ら/彼女らは自らの学費と生活費を負担する以外に、ネパールにいる家族に送金する人も多い。ネパールにいる時の最終学歴は高校卒業であっても、大学卒業であっても、みんな同じくお弁当工場や飲食店で体力を使って働かないといけない。彼らは身体的な面でも、精神的な面でも楽ではない。日本の人手不足により、日本語をあまり話せなくても仕事ができる等の理由で、日本語の勉強を重視していない人が少なくない。

第六章は筆者が参与観察を実施したM居酒屋の事例を取りあげて、在日ネパール人留学生の行動様式やネットワークについてエスノグラフィックに分析した。居酒屋で働いているネパール人留学生とコミュニケーションを取り、彼らの生活様式を観察すると、彼らは育った環境から離れているので、カースト制度や宗教から受ける影響が弱くなっていることが分かる。来日後の生活では牛肉を食べて、お酒を飲む人もいるし、異なるカーストの人と恋人になる人もいる。また、M居酒屋のネパール人留学生のネットワークは日本語学校のクラスとアルバイト先という 2 点に中心を置いている。ネパール人留学生のもう一つの特徴は、そばに人がいない時、いつもライブチャットでネパールの家族やネパール人の友達と連絡していることである。家族と離れた彼らは、日本で友達ができて、心の中はいつも寂しいと感じているから、ライブチャット形で精神的にネパールとの距離を縮めているのではないだろうか考える。

#### **結論:**

在日ネパール人留学生は、負債を抱えて留学し、そのために規定時間を越えた長時間労働に追われていた。そして、在日ネパール人留学生同士のネットワークと、携帯電話で繋がっているネパールの家族に精神的に支えられて生活をしていることがわかった。特に漢字が苦手なことによって、卒業後には日本ではなかなか思うような仕事に就けないことや、日本での留学生活が労働に追われて厳しかったので、卒業後にはネパールに帰りたいと思う人が多かった。先行研究では、在日留学生やネパール人留学生の来日理由や経済的状态は明らかにされていた [岩切 2015、酒井 2008]。中国の家族から経済的援助を受けて大学や大学院で学ぶ中国人留学生と比べた場合、ネパール人留学生は入学試験の難易度の低い専門学校を選択する人が多く、漢字のできる中国人留学生よりも学歴も低く卒業後の就職の範囲も狭いことが指摘されている [眞住 2019]。

本論では筆者の在日ネパール人留学生へのインタビュー調査と居酒屋での 3 年以上にわたる参与観察によって、彼ら/彼女らが留学生として来日しながら、負債を抱え労働している心理的状态や人間関係のあり方を明らかにできた。本論で得られたこれらの知見は、これまでの先行研究では明らかにされていなかったものである。本論はそのようなネパール人留学生の心理的状态や人間関係のあり方を明らかにしたことによって、在日ネパール人留学生が日本で高い学歴を得て、希望する職業に就きにくい理由を、彼ら/彼女らの生活実態から提示できたと考える。